

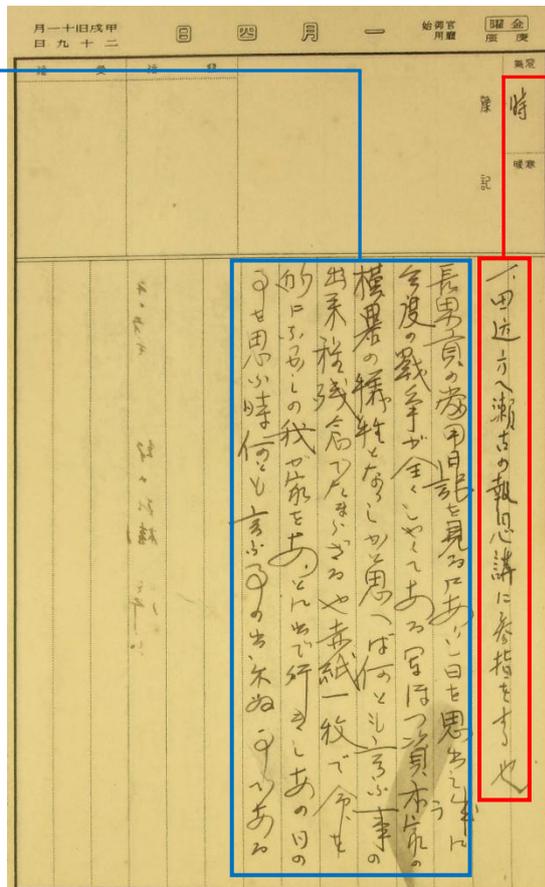
# 戦死した子の日記に書き継ぐ —野原武雄と貢の日記—

野原武雄<sup>の はらたけ お</sup> (1893~1974) は、昭和4年(1929)から死去する昭和48年まで日記を45冊残しており、昭和23年8月から12月までの日記は、戦死した長男・貢の日記(昭和10年分)の空欄に書き継いでいる(下図参照)。日常を書き記した貢の日記に対し、武雄の日記は、生前の貢の姿を振り返り、また貢を失ったことへの悲しみ、戦争への<sup>いきどお</sup>憤りを記している。

図 1月4日の欄

## 野原武雄の日記

「長男貢の当用日記を見るに、ありし日を思出し誠に今度の戦争が全くしやく(癩)てある軍ほつ(軍閥)・資本家の横暴の犠牲となりしかと思へば何とも言ふ事の出来程残念でたまらざる也。赤紙一枚で命を的になつた日の我が家をあとに行きし出来ぬ事である」



## 野原貢の日記

「一、田辺方へ瀬古の報恩講に参指(詣)をする也」